

## ミニシリーズ：プロジェクト評価を考える

### 第1回：プロジェクトとその評価

国際協力という仕事に限らず、実施した仕事の成果に対しては何らかの評価が求められる。それはプロジェクト自体のインパクトや実施した意義を測るためだったり、その結果を第三者に説明するためだったり、あるいは次のステップへ進むための指針を探すためということもある。また、共通の評価項目や評価手法で行う場合は、他のプロジェクトとの客観的な比較にも活用できる。JICAの実施するプロジェクトでは、プロジェクトの評価を判断する基準として、1991年に経済協力開発機構（OECD）の開発援助委員会（DAC）で提唱された開発援助事業の評価基準である「評価5項目（妥当性・有効性・効率性・インパクト・自立発展性）」を採用している。

また JICA の事業評価は評価対象や評価実施段階で分類されているが、例えばプロジェクトの終了時評価では、専門領域の異なる数名のメンバーによって評価チームが生まれ、プロジェクトで何を達成したかという「実績」や、それを達成する「過程」が調査・分析される。評価チームは通常、かなり長期間に渡るプロジェクトを対象にして、その内容を理解することから始めて、実績を把握・解析するという作業をごく短時間のうちにこなさなくてはならない。

例えば、研修活動によって人材育成をしようとするプロジェクトの場合、研修効果は研修回数や研修員の試験成績等の数値化されるデータで評価される場合があるが、このほかにも研修員がどう変化し、どう育ったのかという数字では表しにくい部分も重要である。しかしこのような定性的な部分を評価チームが短期間の調査で的確に調査することは困難な場合が多い。さらに、研修体制や普及体制の改善のようにシステムの改良に関わる部分に関しては、その改良がどういうインパクトや意義を持つのかという評価は、対象国独自の組織、実施体制やその実態を理解していた方がより正当に評価できる。したがって、それらをわかりやすく第三者に示すための現場側（プロジェクト実施側）の努力も必要であるが、評価者が現場実施者と協力・連携して、より日常的にプロジェクトの進捗状況を把握し、プロセスをよく理解した上で評価するというような体制も必要である。

また、環境アセスメントは環境アワズメントと揶揄されるような面もあるが、プロジェクト評価も「評価のための評価」にならないように、プロジェクト活動を正当に評価し、そこから学んで次のステップへつなげる、という作業も重要である。このミニシリーズでは、より良い評価をするためには何が必要なのかという観点から、評価手法あるいはその適用方法等について考え、さらには「やる気」をどう測るか、育った人材の評価はどのように行うのか、あるいは行動変容を把握するためのモニタリングはどんな手法が適切か等についても触れていきたい。



評価作業の現場から



評価する「手」



より良い評価への長い道のり